



高校野球のマナーとルールを学ぼう (第74回)



一般財団法人兵庫県高等学校野球連盟

グラウンドでの試合を振り返り、高校野球の大切なマナーとルールを学びましょう。
あなたの「なぜ? どうして?」にわかりやすくお答えします。

マナー編 アウトになった打者走者が走り続ける行為

外野飛球を右翼手が捕球しましたが、打者走者は一塁ベースを回った後も走り続けて二塁ベースを回り、ようやくベンチに戻ろうとしています。このような走塁は問題ないのでしょうか。

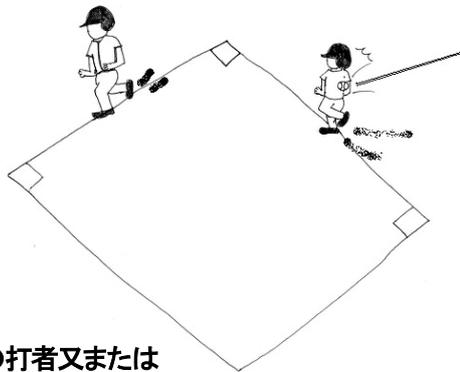
塁上に走者がいない場合と走者がいる場合に分けて考えてみましょう。

① 塁上に走者がいない場合、次のケースで考えてみましょう。

ライトに簡単なフライ飛球が上がったとします。右翼手は打球を捕球後、内野内の野手に返球します。その際、すでにアウトになっているにもかかわらず果敢に走り続ける打者走者の身体に返球が当たる場合があります。実際に練習試合で返球が頭部に当たりそうになったのを目撃しました。大怪我につながるどころでした。

② 塁上に走者がいる場合、次のケースで考えてみましょう。

1死走者二塁、ライトのファウルライン際にフライ飛球が上がります。二塁走者は、右翼手がダイレクトで捕球したのを確認し、三塁へタッグアップ。右翼手は捕球後、二塁走者をアウトにしようと三塁へ送球したところ、二塁ベースに向かって走り続けていた打者走者に当たりました。



ルール上の適用は、次のとおりとなります。

野球規則6.01(a)(5)では、「アウトになったばかりの打者又または走者、あるいは得点したばかりの走者が、味方の走者に対する野手の次の行動を阻止するか、あるいは妨げた場合は、その走者は、味方のプレーヤーが相手の守備を妨害(インターフェア)したものととして、アウトを宣告される」とあります。

なお、【原注】において、「打者または走者が、アウトになった後走り続けてもその行為だけでは、野手を惑乱したり、邪魔したり、またはさえぎったものとはみなされない」とありますが、これは、単に走り続けるという行為のみでは、守備を妨害したものとみなさない旨定められたものであり、このケースのように不用意な走塁の結果、送球に触れることで野手の守備行為を妨げた場合は、妨害の対象になりうるものと解されます。

したがって、アウトになった打者走者が明らかに守備を妨害したと判断されれば、守備の対象である二塁走者をアウトにして、3アウトとなります。**つまり、打者走者(自分)の行為で、味方の走者までアウトになってしまうのです。**

いずれもケースも、野手が落球する可能性を考え次の塁を狙おうとする気持ちで、当たり前のように何気なく行っている動きですが、大きな怪我や妨害行為につながることを今一度考えてみましょう。

ルール編 「2017年の野球規則の改正」

今年度、改正された野球規則18項目の中から、以下の項目を抜粋して紹介します。

1 5.06(b)(3)(C)および同【原注】を次のように改める。(下線部を改正)

野手が飛球を捕らえた後、ボールデッドの個所に踏み込んだり、倒れ込んだ場合。

【原注】野手が正規の捕球をした後、ボールデッドの個所に踏み込んだり、倒れ込んだ場合、ボールデッドとなり、各走者は野手がボールデッドの個所に入ったときの占有塁から1個の進塁が許される。

2 5.09(a)(1)【原注1】の末尾を次のように改める。(下線部を改正)

正規の捕球の後、野手がダッグアウトまたはボールデッドの個所に踏み込んだり、倒れ込んだり、倒れ込んだ場合、ボールデッドとなる。走者については5.06(b)(3)(C)【原注】参照。

3 5.12(b)(6)の前段を次のように改め(下線部を改正)、後段を削除する。

野手が飛球を捕らえた後、ボールデッドの個所に踏み込んだり、倒れ込んだ場合。各走者は、アウトにされるおそれなく、野手がボールデッドの個所に入ったときの占有塁から1個の進塁が許される。

走者に関しては5.06(b)(3)(C)の規定が適用される。

野手が捕球後ベンチに踏み込んで、倒れ込まなかったときは、ボールインプレイであるから、各走者はアウトを賭して進塁することができる。

【コメント1～3】

改正前は、正規の捕球後、野手がダッグアウトまたはボールデッドの個所に倒れ込まない限り、ボールインプレイであったものが、上記1～3の改正により、ボールデッドの個所に倒れなくても、踏み込んだ時点でボールデッドとなり、各走者には1個の進塁が許されることとなりました。

4 5.07(a)(2)【注1】を次のように改める。(下線部を改正)

アマチュア野球では、本項【原注】の前段は適用しない。

【コメント4】

「我が国では」を「アマチュア野球では」に改正されています。【原注】の前段は、「走者が塁にいない場合、セットポジションをとった投手は、必ずしも完全静止する必要はない」と規定されており、今回の改正では、当該規定がアマチュア野球に限り、適用除外されることとされました。

つまり、プロ野球においては、【原注】の前段を適用することとなり、走者が塁にいない場合、セットポジションにおける完全静止が不要となっています。

高校野球においては、これまで通り、**走者が塁にいるいないにかかわらず、セットポジションにおける完全静止は必要ですので、注意しましょう。**

5 6.01(j)および同【注】を追加する。

(j) 併殺を試みる塁へのスライディング

走者が併殺を成立させないために、“正しいスライディング”をせずに、野手に接触したり、接触しようとするれば、本条によりインターフェアとなる。

本条における“正しいスライディング”とは、次のとおりである。走者が、

(1)ベースに到達する前からスライディングを始め(先に地面に触れる)、

(2)手や足でベースに到達しようとし、

(3)スライディング終了後は(本塁を除き)ベース上にとどまろうとし、

(4)野手に接触しようとして走路を変更することなく、ベースに達するように滑り込む。

“正しいスライディング”をした走者は、そのスライディングで野手に接触したとしても、本条によりインターフェアとはならない。また、走者の正規の走路に野手が入ってきたために、走者が野手に接触したとしてもインターフェアにはならない。

前記にかかわらず、走者がロールブロックしたり、意図的に野手の膝や送球する腕、上半身より高く足を上げて野手に接触したり、接触しようとするれば、“正しいスライディング”とはならない。

走者が本項に違反したと審判員が判断した場合、走者と打者走者にアウトを宣告する。

その走者がすでにアウトになっている場合については、守備側がプレイを試みようとしている走者にアウトが宣告される。

【注】我が国では、所属する団体の規定に従う。

【コメント5】

アマチュア野球においては、2013年のアマチュア野球内規の改正により、すでに「危険防止(ラフプレイ禁止)」ルールが規定されています。(下記を抜粋)

・フォースプレイのとき、次の場合には、たとえ身体の一部が塁に向かっていても、走者には妨害が宣告される。

(1)走者が、ベースパスから外れて野手に向かって滑ったり、または走ったりして野手の守備を妨げた場合
(接触したかどうかを問わない)

《走者は、まっすぐにベースに向かって滑らなければならない、つまり走者の身体全体(足、脚、腰および腕)が塁間の走者の走路(ベースパス)内に留まることが必要である。ただし、走者が、野手から離れる方向へ滑ったり、走ったりすることが、野手との接触または野手のプレイの妨げになることを避けるためであれば、それは許される。》(以下省略)

今回の野球規則の改正では、「併殺を試みる塁へのスライディング」の項目が追加されることとなりましたが、アマチュア野球においては、上記のとおり従来から正しいスライディングをせず、野手の守備を妨げた場合は、インターフェアの対象となっていましたので、高校野球においてはこれまで通りの取扱いとなります。

当該規則改正により、“正しいスライディング”の定義が明文化されましたが、アマチュア野球では、従前から正しい走塁を追求してきたところですので、高校野球の選手は引き続き正しい走塁を心がけましょう。